



## 物的設備の有効活用 (減損会計の時代)

(7月のごあいさつ)  
2020年7月1日(水)

昨年6月にファッションをメインにしたパルコシティが開業してからはや1年が経過した。

開店に合わせた徹夜組を含む行列ができ、周辺道路は渋滞の極みであった。新聞記事によると混雑時間帯に安謝からパルコまで、車で1時間20分を要した。大型ショッピングモールに集まる消費者は、何を求めているのだろうか。

買物、食事、リゾート、ハイライフ、バリュー志向など日常を超えた何物かに魅かされているのだろうか。

大型ショッピングモールは、オアシスが起源だと言われている。人々は砂漠の荒涼と索漠、熱気と無味乾燥から、緑と水、休息と快適を求めてオアシスに集まった。しかし、コロナ後は人々の消費行動に変化が起きる。生物学において、いかに小さい淘汰にせよその有利・不利の差により導かれる選抜は、次世代において不適応な個体を排除するという重大な選択を招く。

もはや小さな淘汰と言えない、Eコマースの台頭は、コロナを転機として、日々勢いを増している。ショッピングモールの大規模、集客、価値の創出は、その存在意義を問われ、淘汰に転換し、消費者の時間消費は激変するのではないだろうか。

全国3,000軒を超え、総テナント数は16万軒、年間販売額31兆円の地位は今を頂点として、下り坂となり、更に激しい戦いが見られるだろう。まさに、目の前に淘汰の時代を迎えたのではないかとも思える。

年々増加の傾向にあった外国人観光客の需要は激変し、しかも、全国的な人口減が進み、県内も2025年には減少へ転じると言われている。

観光需要にも支えられた流通業界は、これまでも今後も、国内、国際情勢の変動にも左右されやすいリスクも持っている。しかし、危機という言葉は、「危険」と同時に「機会」という意味を持っている。見方によっては、多くの不確定要素は、沖縄経済の一つの「可能性」とも言える。沖縄経済、特に流通業界は、「経済の崖」を克服して新しい時代を作るチャンスでもある。

会計の観点からは、減損会計の時代を迎えるのは確実である。使用目的で保有する固定資産は、その簿価が当該資産の回収可能額を下回った場合、その下回った額の簿価を切り下げ、減損損失として計上する必要がある。今後は、物的設備の有効活用が生きるか否かが、企業経営のキーポイントとなり、そこにチャンスを見出す時代になりそうだ。